

平成18年度 大学院工芸科学研究科 学位記授与式

学長告辞

本日、修士と博士の学位を取得されました皆さん、まことにおめでとうございます。京都工芸繊維大学を代表して心から祝意を表します。

また、長い間にわたって皆さんの研究を支えてこられたご家族および関係者の方々に対して深い敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和六十三年に大学院の組織を改組し、工芸科学研究科を設置いたしました。そして、今までに、四六五五名の修士号取得者と五八三名の博士号取得者を輩出し、多くの知的財産を着実に蓄積してまいりました。本日、皆さんには、それぞれ修士学位第四六五六号から四六五九号まで、課程博士第四三八号から四四三号まで、また、論文博士第一四七号から一四九号までの学位を授与させていただきましたが、皆さんの研究業績は本学の知的財産とさせていただくこととなります。そして広く人々に公開され、皆さんの後輩である学生の研究のために、また、それぞれの学問分野の新たな展開のために、さらに、技術革新や産業創生の新たな素材として利用されることとなります。

皆さんは、輝かしい成果を挙げ、本日目出度く修士または博士の学位を取得されました。明日からは、新しい環境で、それぞれの将来計画の実現に向け、勇往邁進されることと思います。その際、本学で涵養された能力を十分に生かし、人生の新たな段階を切り開くよう一層奮励努力されることを祈って止みません。皆さんの新しい旅立ちにあたって、最近の社会的動向とそれへの対処法について一言お話ししたいと思います。科学技術は、二十世紀後半から驚異的な発展をみるとともに人間の可能性を限りなく広げてきました。

しかし、その半面で、森林破壊、砂漠化、資源の枯渇化が進み、温暖化をはじめとする深刻な地球環境問題が生じました。南極の氷は、予想を超える速さで崩壊しています。また、エネルギー問題、民族間問題、宗教間問題、富の南北間格差、都市問題といった諸問題も次第に顕在化し、さらにグローバル化と情報化の波が怒涛のように押し寄せて、従来の思考枠では対処できない、新たな問題群が我々に突きつけられるようになりました。科学技術は、二十一世紀になった今も、速度を速めながら展開されています。情報技術はドッグイヤーといわれるように一年間で七年間に相当する進歩が達成されています。私の専門分野である脳イメージング研究分野でも、ここ数年間、急激に論文数が増加しています。皆さんの専門分野でも同じようなことが起きているのではないかと思います。

このような科学的知識の増加について、米国の元下院議長である Gingrich 氏は、次のように述べています。

「現在活動している科学者の数はこれまでの人類史上の全科学者よりも多くなっている。現代の科学者は、優れた性能の機器やコンピューターに囲まれ活発に研究活動を行っている。世界の科学的知識は、これからの四半世紀に少なくとも四倍から七倍増加するだろう。そして、その科学的知識が社会を劇的に変えるだろう。」

さて、本日学位を取得された皆さんは、自分の一生の人生設計を、また二十年後、四十年後の将来像をどのように描いておられるでしょうか？

二十年後は、皆さんはそれぞれの分野で社会を牽引する立場に立ち、活躍されていると思います。また、四十年後は定年を迎える年齢になっておられると推測します。

では、二十年後、四十年後の社会のシステムはどのようになっているでしょうか。日本は、南極は、世界は、また宇宙はどのようになっているでしょうか。

この質問は、百年前の人たちに、現在の社会状況を想像してくださいという質問に似ています。テレビや、コンピューターのなかった時代の人に、ロボットや携帯電話が大きな役割を果たしている現代社会の様態を想像することはとてもできなかったと思います。

ネットワークが世界中に張り巡らされ、情報が瞬時に世界の隅々まで伝えられる現代では、自然や社会と人間のかかわり方、国家や民族の在り方、産業や社会システムの在り方が変化し流動化しています。そしてこのような変化は、人々の人生観や価値観にも大きな影響を与えています。

このような変化の時代の中であって、私たちはどのようにものを考え、どのように物事に対処すればよいのでしょうか。

このようなとき、「不易流行」という言葉がヒントを与えてくれます。「不易流行」は、芭蕉の唱導した理念で「千歳不易・一時流行」の略語とされています。不易の句とは、詩的生命の基本的永遠性を重んじ、発想表現の上で新奇をねらわず、いつの代でもしみじみと共感されるものです。これに対して、流行とは詩における流転の相で、その時々のお好みに応じて「新しみ」を発揮するのが流行の句といわれるようです。普遍性をもった不易相は、刻々の断面に流行相として現れるともいえます。

仕事においては、社会ニーズに直結した応用を目指す分野はどちらかといえば刻々の断面での仕事であり流行の相に対応するものと考えられます。

一方、応用の基盤となる基礎的な仕事は、刻々の断面を超え、また関連する領域をつらぬく根源的な法則を見出そうとしますので、不易の相に対応する仕事ということができます。どちらの仕事を進めるかは、個々の人々が置かれた状況や環境、自らの資質などによって選択するものです。

しかし、流行の相のみに囚われてしまうと、不易の相を見失うこととなります。物事は、これまで経験したことがない新しい事象にみえても、その根底には必ず普遍的な側面があります。不易の相に着目することによって、目先の変化に囚われずに、着実な発展を達成することが可能となります。また、流行の相を、広い視野と長期的な視点で根源的に思考することによって不易の相に転化することができます。

大学では、知識だけではなく、その知識を産む方法論や思考過程の習得を目指した教育を行っています。これは、方法論や思考過程の育成によって、様々な事象に潜む普遍的・根源的な法則を如何に捉えるかということに深く関る能力を開発できるからです。

本日、学位取得された皆さんは、本学の大学院の課程において、または、論文の作成における指導過程において、流行の相に潜む不易の相を把握する力、流行の相を不易の相に転化する能力を身につけられたことと思います。

二十一世紀は変化の時代です。大学で習得された知識は陳腐化してゆきます。自分自身を常に啓発してゆかないと、時代からとり残されることとなります。知識の陳腐化を克服するためには、不易の相の探求こそが重要です。

本日、学位を取得された皆さんは、社会が絶えず変化していることを深く認識し、本学で体得された知と能力を十分に生かして、先入観にとらわれない自由な発想と広い視野で、これからも弛まず自己啓発を行ってください。そして、変動する社会に正面から向き合って、社会の牽引者になってください。

皆さんは明日から新たな挑戦をはじめられることとなりますが、皆さんの活動が世界の人々の幸福に大きく貢献することを祈って、私の告辞といたします。

学位の取得、まことにおめでとうございます。

平成十八年九月二十五日
京都工芸繊維大学長
江島義道